置いていかれた者は、厄介ごとに巻き込まれる

ハタボー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
置いていかれた者は、厄介ごとに巻き込まれる

【Ｎコード】
Ｎ１２８０Ｚ

【作者名】
ハタボー

【あらすじ】
あこがれの男を追ううちに何か終わっていた。
意気消沈していると、いつの間にか異世界を渡ることになる。
一体、どうなるのか。

オーフェンはともかく、とあるの方の原作は知っておいた方がいいです。

レールガンアニメまで（８月９日とする）は、ほぼ原作通りです。

プロローグ　その者目的地に辿り着いたはずだった（前書き）

一度書いたらタイトル入れてなくて失敗。
再び挑戦したためか内容が変わってる。

プロローグ　その者目的地に辿り着いたはずだった

キリランシェロ、魔術士の名門と言っても良い牙の塔に置いて、チャイルドマン教室に籍を置き、鋼の後継や戦闘芸術品と呼ばれた少年。
謎の出奔を行い、追跡者を撒いている人物。

そして、あこがれであり、目標であり、標的である人物。
僕ことクリス・ブリードは、テーブルに肘を置いて、何気なく食堂内の人の動きを追いながら回想する。

彼の出奔は突然であった。
アザリー先輩が居なくなり、彼まで居なくなった。
あこがれのキリランシェロの出奔という出来事に落ち込んでいる僕に最高執行部から命令に下ったのは、出奔から実に一週間も後の事だった。
『キリランシェロの追跡。当人と接触し、帰還要請を行い。受け入れ無い場合の殺害。』
まだ十三歳になったばかりである僕に何故そのような命が下ったのかは分からないが、彼にあこがれていた事、チャイルドマンとの繋がりなどは知っていたのだろう。
殺す気などないし、殺すことなど無理だと知っていた。
だが、多少強引でも連れ戻すか、出奔の原因解決に尽力する気はあった。
そして、彼の出奔から一週間と二日後、彼を追って牙の塔を出た。
大陸魔術士同盟から支援を受けやすいようなのか、上級魔術士のローブを貰って、意気揚々としていたのも数日までであった。
彼の後を追う事三年間。

アレンハタムでは魔術士狩り？にあって吹き飛ばし、
道中武装強盗にあって吹き飛ばした。
途中の山中では謎の女性に襲撃されて、戦闘の末吹き飛んだ。
また、別の町では黒髪で無能っぽい派遣警察の女性を吹き飛ばした。
小さな村では少女に絡まれた上、不親切極まりない村人達を吹き飛ばせずに林をこっそり吹き飛ばし、
追いつけないことに腹を立てて岩を吹き飛ばしたら、遺跡に呑まれて数日彷徨いつつ変な経験を得た。
そんな苦労の果てに情報を得て、トトカンタまでやっとの思いで辿り着いたのである。

コンッ
木製のテーブルに固い物を置く音が目の前でしたため視線を下に向けると、美味しそうなグラタンが置かれていた。
思わずフォークを取って食事を始めようとするが、思考がそれを邪魔する。
目の前のグラタンで財布の軽さは二分の一になる計算になる。
どうせならおいしさを噛み締めて食べなければもったいない。
クリスは軽く頭を振って、これまでの苦労やこれからの事の不安などを吹き飛ばし、久しぶりのごちそうに食らいついた。
そのあまりの食べっぷりに、マスターがご飯のお代わりを無料にしてくれたぐらいである。

「あ～食べた食べた。」
結局お代わりを三杯もしてしまった。

膨れたお腹を擦っていると、入口から特徴的な黒色のローブが入ってくるのが見えた。
大陸魔術師同盟に似ている気もしないではないが、どこか違う印象を受けた。
ローブを着ていたのは、長い黒髪をポニーテールにした二十歳くらいの女性である。
その女性のパッチリ開いた目がクリスを捕えた。

「うわっ！」

視線がクリスの胸元に行き着いた瞬間、丸い目がもっとまん丸に見開かれた。

「マスター、いつものくださーい。」

知り合いらしいマスターに注文すると、女性はまっすぐクリスの元に近づいて来た。
自分の格好を咄嗟に確認した。
動きやすいジーンズにシャツを二枚着て、黒いジャケットを着ている非常に自然な格好のはずである。
胸元のドラゴンの紋章は知っている人は知っているが、普通のファッションともいえるし不自然ではないはず。
近づいて来る女性を軽く警戒しながらも、会釈してくる女性に正面の椅子を手で進めた。

「ありがとう。」

どこか間延びした声で女性が返事を言って、正面の椅子に座った。

「えっと、それでなんですか？」

綺麗な女性、というより黒くない女性に耐性がほとんどないクリスは、警戒とは別の意味の緊張が高まるのを感じていた。

「それ、牙の塔のペンダントですよね。まずはそれを隠してください。」

「？」

何か分からないが、ジャケットのボタンを留めて中にペンダントを隠した。

「それでトトカンタに何のようで来たんですか？」

にこやかな笑みを浮かべつつ、独特な圧力を醸し出す女性。

ああ、この人は黒じゃなくて虹色の人かあ、と目の前の人を分析しながら、答えを考える。

「人を探しているんです。同じ牙の塔出身の魔術士を。」

途中から考えるのが面倒になって正直に答えることにした。

大陸魔術士同盟なら問題ないはずである。

「名前は？」

「キリランシェロ、今はオーフェンって名乗ってます。」

ザワッと食堂の空気が変わった。

「ま、魔王？」「爆発男か。」「穴が、穴がー！」「お、落ち着け。

」「当番が来るのか。」「か、帰ってきたのか？」「無能と爆薬が・・・」「ま、待て、戦乱を潜り抜けた俺たちならできるはずだ。」「待て、ここが拠点だったはず。」

頭に手を当てて叫びだす人や不穏な発言が飛び交う中、最後の一言が出た瞬間、宿屋全員の動きが凍りついた。

そして一瞬の間を置いて、客だけでなく店員も含めた全員が食堂から飛び出して行った。

「か、会長に連絡を！」「警官隊を出動待機だ！」「同盟にも通達を！」

外でも叫び声が響き始めた。

「な、なんだ？」

訳が分からないクリスに、女性とマスターが目を合わせて肩をすくめた。

「とりあえず、ここを出て私の職場まで来てください。」

「お代わり二杯分は払ってもらうぞ。」

どうやらお代わり無料なのは一杯だけになったらしい。

オーフェンの一言を出しただけでこんな事態になるなんて。

泣く泣くクリスは、財布を開いた。

これで、中身が無くならないことを願って。

プロローグ　その者目的地に辿り着いたはずだった（後書き）

さてはてクリスは何を言われるのか。

1話　置いていかれた者（前書き）

オーフェンはもう居ません。

別大陸に行ってしまっています。

1話　置いていかれた者

「そ、そんなことが・・・」

「何も知らなかったんですかぁ？」

クリスは、応接室で頭を抱えて項垂れた。

魔王オーフェンによるアイルマンカー結界の崩壊などを切っ掛けとした貴族連盟と大陸魔術士同盟の紛争であるキエサルヒマ紛争。

そんな中で最前線となったトトカンタ市は、紛争終結後貴族連盟から離脱。

大陸魔術士同盟トトカンタ支部も戦力をほとんど送ってくれなかったこと、市街地戦になったのに勝手に貴族連盟と紛争終結を行った大陸魔術士同盟を忌み、独立してトトカンタ魔術士同盟となった。

そんな経緯を話してもらったクリスは、あまりのことに混乱していた。

対する説明してくれ女性。

トトカンタ魔術同盟に所属しているラシィ・クルティと名乗った。

も全然事情を知らないクリスを不思議そうに見ていた。

「それで、牙の塔を恨んでいる人もいるんです。」

「どこで時間が跳んだんだ？あの緑色のキノコを食べて気を失った時か？自爆した時？派遣警官を吹き飛ばして牢屋に入れられた時？」

ラシィの言葉など耳に入らないクリス。

それもそうだろう。
キリランシェロを追いかけて三年で、世間では八年程経っていたのだから。

「オーフェンさんなら、別大陸だと思いますよ。代表が言ってましたから。」

「ああ、そうだ。あの遺跡だ。あの遺跡のせいだ。なんかおかしいと思ったんだよ。あの後、町がボロボロだったり、暗い雰囲気が多かったから。じゃあ、なに？一日一年経ってたってこと？理不尽だ。ドラゴンでもできるのか？」

話を聞いていないクリスに、頬を膨らませたラシィは魔術を構成し始めた。

「蝙蝠の・・・」

目の前で構成される魔術に、クリスの体が勝手に反応した。
防御魔術を構成しつつ、ナイフを取り出す。

「ラインダンス！」
「我抱きとめるじゃじゃ馬の舞！」

何も起こらなかった。
クリスの魔術によって魔術が中和されたからであるが、同時にクリスも我に返ってナイフを収めた。

「そ、それは・・・」

「すみません。ちゃんと聞きます。」

驚きを隠せないラシィを制して、クリスは謝った。
幸い部屋の外には知られていないらしく、誰も来ないことを確認する。

「では、説明しますね。」

落ち着いた所で、説明を受けるクリス。

牙の塔を恨みに思う人がいるトトカンタでは、牙の塔であることを示すドラゴンの紋章はできるだけ隠すこと。
探し人のオーフェンは魔王と呼ばれ、原大陸に行っているらしいことなどを聞いた。
だが、一番の驚きだったのは、ハーティアがここの魔術士同盟の代表をやっていることであった。
思わずクリスが、「あの不勝のナンパ師が！？」と叫んだくらいである。

ともかく、説明を受けたクリスは命令はもう無しかなと勝手に判断した。
だが、もっと衝撃はこれから来る。
一区切りついたと、判断したラシィは再び口を開いた。

「実はですね。大陸魔術士同盟によると、クリス・ブリードは死亡扱いになっているんですよ。ですから、あなたはモグリさんということになりますぅ。」

「はあ。」

間延びした口調を聞いたイラつきが衝撃を緩和する。

「はあっ！？」

わけがなかった。

「なんで、勝手に人殺してんだよ！」

「書類では、オーフェンの護衛をしていたクリスを貴族連盟の暗殺者が殺したことになっていますね。紛争での正当性の一つとしたみたいです。」

開いた口が塞がらなかった。

確かに頻繁に連絡していたのが途絶すれば、除名か死亡扱いされてもおかしくないが、全く関係ない紛争に使われるとはひどい扱いだ。

「・・・お金どうしよう。」

始めに考えたことはお金のことだ。

この三年の追跡で一番困ったのは金銭であったため、体に染みついているのである。

「ほんと、モグリさんに似てますねぇ。」

靴でも磨くか？と呟くクリスを見ながら、ラシィが呟いた。

「そのモグリさんって、キリランシェロ先輩、オーフェンさんのこと？」

「はい。モグリさんには困らせられましたぁ。」

それから二時間程モグリさんの話を聞くことになった。
トトカンタ市の破壊活動、派遣警察やウェイトレス、執事との絡みが一割、残り九割はラシィの愚痴であったが。
もちろんクリスのキリランシェロ先輩像が破壊されていったのは言うまでもない。

話が終わったクリスはラシィの同盟加盟を一旦辞して、最初の食堂に戻って一泊することにした。
宿屋、バグアップズ・インに泊まることにしたクリスは、二階の一室でベットに寝転がった。

「何もかも終わった後って感じだ。」

オーフェンのトトカンタにおけるドタバタ日常に西部から東部への旅と結界解除。
そして、キエサルヒマ紛争。
自分の三年の内に全てが終わっていた。

「そしてあの時見た映像はその時のもの。僕は傍観者としても失格。しかも死んでることになってるし。」

遺跡でクリスは、どこかの映像のようなものを高速で流しているのを見かけたが、少しだけ見て探索に戻ったのである。
そこでじっと見ていれば、傍観者という立場には立てていたかもしれない。

遺跡に八つ当たりさえしなければ、キリランシェロ先輩を手助けできたかもしれない。
空しさだけが押し寄せて来た。

『じゃあ、あっちこっち行って見る？』

「誰！？」

どこからか、変な声が聞こえてきた。
ベットから身を起こして部屋を見回すが、壁に穴はなく、ベットの下にも誰も居ない。

『返事くらいしなさいよ。』

どこか拗ねた様な口調になった声だが、クリスにそんなこと気にしている余裕などない。
感覚を鋭敏にして声の出所を探るが、上のような左右のような変な感じである。

『まあいいわ。じゃあ、行ってらっしゃい。』

最後に見たのは、私物に手を伸ばす自分の腕だった。

1話　置いていかれた者（後書き）

オーフェンの世界を出ました。

次は定番といってもよい学園都市。

主人公、レベルアップできるかな？

2話　未来都市（前書き）

ちょっと主人公紹介

クリス・ブリード（現在１５）

１６３センチ　５２キログラム

見た目健康的であるが、意外としっかりした体である。
肩より少し長めの黒髪　黒目　ちょっと眉細め

キリランシェロのファン。
毎日観察して、魔術はほぼオーフェンと同じ発動呪文。
牙の塔では担当教師よりチャイルドマンを追っ掛け回し、そのしつこさからこっそり手合せして貰っていた。
見ているだけでマネできる辺り、魔術や体術の才能はある。
チャイルドマンからアザリー追撃の要請が来るも、実は寝ぼけていて覚えておらず不参加。
そして、最高執行部からの命でキリランシェロを追う。

2話　未来都市

目を覚ますとそこはどこかの部屋であった。
ベットは、安宿のようなあるかどうかすら分からないクッションではなく、今まで寝たこともないふかふかのクッション。
布団も青を基調にした格子状の白い線が入っているふかふかした布団。
もちろん枕もふかふかしていた。

「ふかふかー。」

そのまま寝たい欲望を抑え、枕を抱いたまま上半身を起こした。
自分の服装はいつの間にかレモン色のパジャマになっていたが、まあ問題ない。
枕元の小さなテーブルの上には、材質不明の中身が透けている時計。
本棚には塔でしか見たことが無いほどの量の本が隙間なく詰まっており、机の上には筆記用具が散乱していた。
そして、ハンガーに掛かっている女物の制服。

「なんだこれ？」

時計の隣に二つの冊子が置いてあった。
タイトルは、『常盤台入学の手引』『ここにおける優遇とサービス』と『調査を上手くやる方法』
さっぱり意味が分からなかったが、ここに送った謎の人物の仕業だろう。
ここに関する事が何か乗っているかもしれないので、冊子一つを手に取った。

冊子には何か紙に挟んであり、それを見て目を輝かせた。

「これをこうやって、こう？」

台所のコンロの火をつける。
お腹が減ったため台所に来たクリスだったが、知らない機材がたくさんあった。

ここはクリスがいたキエサルヒマ大陸がある世界ではなく、科学がより進んでいる別世界だと挟んであったメモに記述されていた。
部屋にある物や基本的な物の名称と使い方も書かれており、それを見ながら台所で調理していた。

「おお、こんなに簡単につけれるんだ。」

牙の塔時代にコンロを見たことがあるが、こんな小型で簡単に付けれるものではなかった。
どうやら本当に技術が発達した所に来たことは分かった。
コンロの他にも冷蔵庫や電子レンジ、炊飯器など知らない物がたくさんあった。
その一つ一つを確認しながら何を作ろうかと考える。

「食べ物は・・・この箱、冷蔵庫か。今度は電気で動いている、と。電気って確か王都とかではあったんだよね。まずは食事食事。簡単なものでいっか。」

どういう仕組みなのか調べようとする探究心を抑えて、朝食の準備を始める。
まず、冷蔵庫からベーコンと何故か入っていたパンを取り出す。
そして、火をつけたフライパンに容器に入った油をしいて、ベーコンを焼き始めた。

「飲み物も色々あるんだな。ここは良い場所だなあ。」

顔がにやけるのが止まらない。
キリランシェロ先輩を追い始めてから最初と最後以外は碌な物を食べた記憶がないクリスには、これだけでここに来た甲斐があった。
嬉しそうにパンをスライスして、ベーコンを待つ。
いい匂いがし始めたベーコンをパンに載せて、コップにオレンジを注いだ。

「よしっ！」

ニッと笑みを浮かべて、パンに齧り付き始めた。

灰色のブリーツスカートに半袖のブラウス、袖なしのサマーセーターを着たクリスは、部屋にあった大鏡の前に立った。
女子中学生としては平均より少し高めの身長、肩甲骨までストレートに伸ばした黒髪。
少し吊り目だが、愛嬌のある顔だと言えよう。
まったく胸は無いが、常盤台の制服は似合っていた。
このまま登校してもいいかなと、部屋を出た。

「どこの高級ホテルだよ。」

ここは寮らしいが牙の塔の女子寮とは大きく違っていた。
牙の塔は無機質な石造りの建物で、窓も多くなかった。
だが、ここは大きな窓が等間隔に並び、壁には絵も飾られており、高価な印象がする寮である。

少しの間絵を見ていたクリスは、ゆっくりもしていられないことを思い出し、部屋番号を覚えて廊下を歩きだした。
メモによると、今日は六月三日で常盤台中学という場所に転校する初日らしい。
寮は第七学区という場所にあり、バスで学舎の園の中にある常盤台に通う。
だが、今日は早めに行く必要があるとのことで車の迎えがくるようだ。

引き出しに入っていた腕時計を見ると、針が６：３０を指していた。
武骨な代物で鉄ではない金属でできており、いざというとき手に嵌めれば？というメモが張り付けてあった。

常盤台の制服も戦闘の役に立つよう改造が施されてあった。
常盤台の生徒は普段でも制服着用を義務付けており、休みの日でも制服でいなければならないため助かる代物だった。

「なんか、地味に驚くことばかりだなあ。」

メモおかげで驚くより、感心することばかりである。
便利だけど新鮮味が薄くなってるなと思いつつ、寮の前に止まっ

ているはずの車に乗るために廊下を進む。

「そこの女子、起床時間には早い・・・転校生か。」

「はい、今日からお世話になりますクリス・ブリードです。よろしくお願いします。」

廊下の向こうから急に話かけてきた寮監らしい女性に敬語で挨拶をしながら、自分で敬語を勝手に使ったことに驚いていた。

孤児だったクリスは、牙の塔に拾われてから問題児と一緒の部屋だったこともあり、敬語？なにそれおいしの？といった感じであった。

牙の塔での担当教師もその辺りが適当な人で、教師だからと言って無理に敬語を使わせようとしなかった。

彼が言った言葉は、「尊敬できるなら敬語を使え。」である。

一応、一通りの敬語はもちろん、様々な教養は身に付けている。

そんなクリスだから、演技もせずに初対面で自然と敬語を使ったことが驚きだった。

寮監は、三角の眼鏡ごしに鋭い視線をクリスに向けた。

「寮則については知っているか？上から君についてある程度の自由を許すよう連絡が来ているが、容赦するつもりはないぞ。連絡が無い場合、後からでも罰則は受けてもらう。」

「はい。」

「規則を守りつつ、学園生活を楽しめ。」

しっかり目を見ながら返事をすると、寮監はふっと目を和らげた。
ポンッと肩を叩いて、去っていく寮監の姿を見ながら、母親とはこんな感じなのかと学園生活に寄せる期待を上げた。

「あ、時間。」

６：４５に迎えが来ることを思い出して、少し足早に玄関に向かった。

車を見ると、大陸横断鉄道を思い出した。
あれも初めて見たときは驚いたものだ。
その時は、興奮して魔力の暴走で列車を故障させてしまい、担任から散々怒られた。

「本当にこれで動くんだ。燃料は何だろう。」

学園に着いて車から降りたクリスが呟いたのは、この言葉だった。
運転手は、ハンドルやレバーを動かすだけでじっと座っているだけなのに車は勝手に動いている。
どうやら列車と同じように燃料を入れて、レバーを動かすと連動して車体を操作できる。
学園に着くまで車を見ていたが、燃料が見当たらなかったのである。

ここにおける建物の基本的スタンスは、キエサルヒマと同じような感じである。
ただ、窓やガラスがより多く、レンガなどではない謎の材料を使っていた。
案内図を見ながら校長室を向かっている最中にそんなことを考察していた。

校長室に辿り着いたクリスがノックをすると、すぐに返事が返ってきた。
扉を開くと、奥に校長らしき男と手前のソファに長身の女性が座っている。
クリスの姿を見ると、女性が立ち上がって近寄って来た。

「クリス・ブリードさんですね。私は貴方の担当になる暮林といいます。」

「クリス・ブリードです。よろしくお願いします。」

「あなたは個別教室になっています。手続きは済んでいますので、早速始めましょう。では、校長先生失礼します。」

校長に一言も話させないまま暮林はクリスの手を引く。
トントン拍子に進む話についていけないクリスは、暮林に手を引かれて校長室を出た。

「ふう～。」

肺に溜まった空気を全て出すかのように、深く息を吐いた。

暮林に連れられて、クリスは色々なことをやらされた。

まずは能力検査。

学園都市では魔術は嫌われているため、炎の能力者に見せかけると吉と最初のメモに書かれてあったため、炎の魔術を手加減しながら使った。

その結果はレベル３。

ぎりぎり常盤台に入れるレベルである。

非常に高い温度まで出せ、大まかな温度の調節や炎形状など操作もできるが、声を出す必要と短時間のみの発現から、レベル３止まりであった。

暮林はこんな者が個別教室になる理由が分からないと首を傾げていたようだが、体力測定には感嘆の声を上げていた。

クリスは体術も叩き込まれる牙の塔出身であり、旅を出始めてからも身体能力は上がり、能力を使わない場合の身体能力において常盤台どころか人間の最高ランクの身体能力を手に入れていた。

高校生と比べても余裕で勝てるレベルを叩き出すクリスに驚きつつ、能力には役に立たないこの分野ではねと落胆していた。

そして、最後の学力テスト。

ここでクリスの弱点が露呈した。

キエサルヒマにおいては博識である魔術士も、この学園都市においては小学生レベル以下の分野もある。

暮林は、薬の投与や機械による干渉を禁じられているこの不思議な生徒の能力アップの方法として、訓練よりまず学力など知識の向上を重点的にやることにした。

数日は自由にしていいわと言った後、小学校にも電話を入れていたため、今頃何から教えるかのカリキュラムを考え込んでいるのだろう。

一方クリスは、学力調査などから知識量の不足を感じて検査結果が出るまでパソコンという物を使って色々調べていたが、教室を追い出されて学園を見学することにした。

しばらく見て回った後、時刻を見ると既に４：００を過ぎていた。

魔術に体、頭の行使と流石に疲れていたが、どこか満足感を抱きつつのんびり歩く。

周りには、下校している生徒もちらほらおり、会話も時節拾っていると、突然背中に何かがぶつかってきた。

強い衝撃にたたらを踏むが、転ばずに体制を立て直したクリスは後ろを振り向いた。

「ごめん。大丈夫だった？」

そこにはショートヘアをした茶髪の少女が心配そうに見つめてきていた。

2話　未来都市（後書き）

まずは定番かもしれない学園都市。

主人公にはレベルアップの下地を作ってもらいます。

更新間隔は、今の所二日に一回にしていくつもりです。

3話　主人公（前書き）

御坂さん登場

3話　主人公

彼女を一目見て、クリスは既視感を感じていた。
まるでどこかキリランシェロを初めて見た時のような憧れや眩しさ、少しの妬みを同時に感じたのだ。

「大丈夫？」

少女の声で我に返ると、肩までの短い茶髪の少女が、こちらを心配そうに見ていた。
同じ常盤台中学の制服を着て、ヘアピンだけのおしゃれが少女自体の魅力を引き出している。

「あたり、いえ、大丈夫です。」

「ごめんね。黒子を撒こうとしてて、前をよく見てなかったから。」

「こっちこそ、珍しいものばかりで注意散漫だったからお相子です。」

調査マニュアルに書かれていた対外用の丁寧語を使って応対する。
少女は、首をわずかに傾げてクリスの顔をじっと見つめて来た。

「転校生？」

態度がおかしいと感じたわけではないことに内心安堵しながら、落ち着いて答えた。

「はい、今日から常盤台中学に入るクリス・ブリードです。」

「私は御坂美琴、よろしく。」
「お姉様ー。」
美琴の向こうから鈴のような声が聞こえた。
「あらお姉様、そちらのお方はどなたですの？」
「こちらは、クリス・ブリードさん。さっきぶつかって謝っていたの。」
「そうですの。私は白井黒子。お姉様の露払いをやっておりますの。」
黒子は美琴より長めの茶髪を奇妙なツインテールにした美少女だった。
彼女はクリスを威嚇するような雰囲気を醸し出しながら美琴の横に並んだ。
「初めまして、クリス・ブリードです。」
「今日から常盤台にいるらしいの。今までどこに通っていたの？」
「え、えっと、外の中学で、学園都市自体初めてです。」
「じゃあ、学園都市案内しようか？」
「お願いします。」

「わ、私も行きますわ！どこぞとしれない猫と一緒にできませんわ。」

三人はまず学舎の園から回ることにした。

空を見上げると、新しい生活を祝うかのような青い空と空を飛ぶ船もどきが浮かんでいた。

3話　主人公（後書き）

今回は二人と知り合うだけですので、短いです。

4話　休日と銀行強盗（前書き）

佐天涙子と初春飾利の登場

4話　休日と銀行強盗

美琴や黒子に学園都市を案内してもらい、その後数日は自由時間が与えられ、楽しく散策していた。
だが、それも暮林がカリキュラムを作成するまでの数日までであった。

「なんか、この展開あったよね。」

とぼやきつつ、ペンを持ってボードに文字を書き込んでいく。

「まさか一般常識まで欠如してるとは思わなかったわ。さっさと解きなさい。」

暮林は解いていくクリスの採点を同時に行いつつ、教材を作っていた。

カリキュラムが作成し終わると、その日から毎日朝から晩までほとんど休憩なく勉強をし続けていた。
朝から夕方までは物の名前から小学生問題といった勉強を行い、夕方からは驚異的な身体能力を維持し発展させるための鍛錬を行っていた。
そんな毎日ではぼろぼろになって寮に戻るのが精一杯であり、美琴や黒子といった知り合いに会えず、新しい友達もできるわけがない。
だが、新しい知識を、新しい体術を学べるというものは楽しいことではあった。

そして、そんな半軟禁状態が続いて半月。

「え、今日はもう休んでいい？」

「ええ、あなたの吸収率が思ったより早くてね。調整するから今日はもう自由よ。久しぶりに遊んでらっしゃい。」

「よっしゃー。これで年増意外と喋れる！」

ガッツポーズをしたクリスの首根っこが掴まれた。

「誰が、年増、だって？」

「あ～、りょうか、いやいやいや、校長のことですよ。」

クリスがこの半月で会話したのは、寮監と校長と目の前にいる暮林先生だけである。

暮林はそのことを知っており、目を細めて口を三日月みたいに歪めた。

「ふむ、寮監にはお世話になっているから今度飲みに誘うか。」

「学舎の園の外でプレゼント買わせて貰います。」

「よし。」

半分浮いていた体に重力が戻った。

首を擦るクリスは、足を組んで椅子に座り、コーヒーを優雅に飲むスーツ姿の美女を見た。
暮林教諭は眼鏡こそ掛けていないが、寮監に雰囲気が似ている知的美女といった感じの人である。
丁寧な口調だったのは初対面だけで、次の日からどうせ長い付き合いになるんだとクリスをこき使い始めた。
クリスもそんな暮林には元の口調で話していた。

「じゃあ、行ってきます！」

元気よく教室を飛び出したクリスだが、既に時間はおやつ時、学舎の園を出たところで小腹が空いてきた。
辺りを見回すと、公園らしき場所にクレープ屋が見えた。

「クレープ。向こうにもあったけど、食べたことなかったな。」

ちょうど並んでいる列も途切れそうだったので、買いに走る。

「ありがとうございましたー。」

ハキハキした声に見送られてクレープ屋から離れたクリスは、待望の一口目を食べようとした瞬間、ベンチに美琴と黒子、他の女子二名を見つけた。
向こうもクレープを食べているようだ。

「美琴ー！」

一緒に食べようと少し早足で近づく。
声に気付いた美琴と黒子がこっちを向いた。
二人とも当然常盤台の制服であったが、残りの二人はセーラー服を着ていた。

「あ～、クリスじゃない。」

黒子に迫られていた美琴は、黒子を押しのけてベンチから立ち上がった。

「ああん、お姉様ー。」

引き離された黒子は不満そうな声を上げるが、それを無視した美琴はクリスの元に来る。
美琴はクリスを上から下まで見て、何の異常もないのを確認した。

「あれから一度も会わなかったから気にしてたのよ。」

「まあ常盤台も広いし、忙しかったからこの一か月寮と学校を行き来してただけだから。久しぶりに外に出た気分。」

「え～と、そちらは？」

美琴の後ろにいた知らない少女二人の髪の長い方が、おずおず聞いてきた。

「ああ、こちらはクリス・ブリードさん。同じ常盤台の二年。」

「初めまして半月ほど前にここに来たばかりだから、何かと聞くか

もしれないけどよろしく。」

「こっちのロングヘアが佐天涙子。こちらの花飾りをつけている方が初春飾利。両方とも柵川中学の一年生よ。」

「初めましてー。」

佐天と呼ばれた少女が何か期待に満ちた目で挨拶してきた。
クリスと同じくらい髪を伸ばしており、頭に花型のヘアピンをしている。
目元を除けば、クリスと似ている印象を受けた。
もう片方の初春は、頭の花飾りが特徴的な子だった。
その飾利は別方向をさっきから見ていた。
クリスがどこを見ているのか視線を追うと、シャッターが閉まっている銀行があるだけだった。

「クリスさんって、何レベル・・・」「あの銀行なんですけど、なんでシャッターが・・・」

涙子と飾利のセリフを遮るように、爆発音がしてシャッターが破られた。
周りから悲鳴が上がり、中から黒い煙が出てくる。

「初春。アンチスキルへの連絡と怪我人の確認。急いでくださいな。」

「はいっ！」

ジャッジメントである黒子が、腕章を付けつつ飾利に指示を出す。

「黒子！」

「いけませんわお姉様。学園都市の治安維持は、私達ジャッジメントのお仕事。今度こそお行儀良くしていてくださいな。」

ニッと笑って美琴を見る黒子。

それを見て、美琴もふっと力を抜いた。

「・・・あれ？クリスさんは？」

何かカッコイイ二人を呆然と見ていた涙子は、クリスが居ないことに一人気が付いた。

クリスは、風紀委員の二人が反応するより早く動き出していた。

公園から道路を隔てて銀行がある。

銀行のごく近くにはたまたま人はおらず、煙でよく見えないが破られたシャッターから人が出て来ようとしているのが見えた。

おそらく銀行強盗が脱出のために破ったのであろうと検討を付けたクリスは、どう対処しようにも近づく必要があると走っていた。

再び爆発音と、先ほどより小さいが新たな黒煙が上がる。

「おら、ぐずぐずするな。さっさとしねえと・・・」「お待ちなさい！」

煙の中から黒いジャケットを来た三人組が走り出てきた。

そして、逃げようとする三人の先頭を走る男の声を遮ったのは、三人の数メートル前にテレポートした黒子であった。

前方にいきなり現れたことに驚いてか、三人が足を止める。

「ジャッジメントですの。器物破損及び強盗の現行犯で拘束します。」

腕の腕章を見せながら宣告する黒子。

だが、三人の反応は鈍く、お互い顔を見合わせる。

そんな三人に、黒子も怪訝な顔をする。

『あっはははは。』

間をおいて三人が爆笑し始めたのを見て、黒子が軽く舌打ちした。

「なんだよこの餓鬼。ジャッジメントも人で不足か？」

「おら、お嬢ちゃん。とっととどっか行かねえと、」

腹まで抱え始める三人に、厳しい表情をした黒子が一歩一歩歩み寄る。

そんな黒子に、髪を刈上げた男が駆け寄りながら言った。

「怪我しちゃうぜ！」

「そういう三下のセリフは。」

そう言いながら殴りかかる男の拳を、黒子は軽く躱し、腕を掴んで足を掛けて体を一回転させて地面に落し、

「死亡フラグですわよ。」

冷たく地面に倒れた男を見下ろしながら告げた。

「なっ！？」「てめぇ。」

息がる残る二人だったが、それを見逃すクリスではない。
道路側に立っている肩まで髪を伸ばしている男の後ろに音もなく忍び寄り、足を掛けて体制を崩しつつ腕を基軸に地面に叩きつけた。
止めに、足を鳩尾に入れて気絶させる。

「こっちにも！？」「クリスさん？」

残る一人が、黒子とクリスを視界に入れて左手を前に出す。

「今更後悔しても遅いぞ。俺を本気にさせたからには・・・」

喋りながら男の左手の上に炎が出現する。
長々と話すのを見逃すクリスではない。
瞬時に魔術を構成させる。

「我は放つ光の白刃！」

クリスの右手から白い光が放たれ、自慢げに話す男の頭に直撃した。
小さい爆音とともに脳を揺らさせた男が倒れた。

「よし、解決。クレープの敵は取ったぁ！」

フンッと腰に手を当てて一人頷くクリスだった。
そのクレープは爆発音に驚いて落としたため、ベンチの近くに落ちていた。

4話　休日と銀行強盗（後書き）

美琴のレールガンの登場シーンなし。

そういえば、アニメと原作では時系列が違うみたいですね。

その辺良くわからないので、多少おかしなところが出てくるかも。

一応辻褄を合わせるようにしますが、漫画のとある科学はイベントが無くなるかも。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1280z/

置いていかれた者は、厄介ごとに巻き込まれる

2011年12月14日00時54分発行